ひまわりからのメッセージ

74号
2017.6.5
NPOひまわりの花内
西濃圏域
発達障がい支援センター
発行人：中野たみ子

朝の散歩道で

主人が体をこわしてから、朝夕の犬の散歩は私の日課になりました。朝、五時半に家を出ます。朝の陽が射しはじめ見上げれば澄みきった青空、ほほを撫でる風、樹々の息吹が体全体を包み、遠近に啼く鳥の声も心に安らぎを与えてくれます。

それなのに今朝は、砂漠の砂のにおいがたまらなく恋しくなりました。私の遠い祖先は砂漠に暮らす民であったのではないかと思うのですが、かつてゴビ砂漠やサハラ砂漠を旅した時の何とも言えない安堵感が、なつかしく思い出されたのです。

そして同時にシリアの人々のことを思いました。もう、決して見ることは叶わないパルミラの遺跡のことを思いました。ISへの爆撃は、テロリストだけではなく、多くの人々の命を奪っていくのに、私たちは、無関心になりつつあります。テレビが映し出す現実は、まるでフィクションの世界のようにしか感じられなくなっていくように思います。今、私がこうして生きている現実の世界と、余りにもかけ離れたところで、死と日々対き合って暮らす人々のことを思ったのです。

頭の中でそんなことを考えながら歩く私の傍らで、わが犬は時折立ち止まりながらも私の歩に合わせてくれています。近くの神社では、私の参拝に合わせてしばらく静止して待つのです。野良犬の仔として生まれ、十五歳になろうとしているこの子は、きっと、何かを感じ取っているのでしょう。

それにしても、この私に何かできることはないのでしょうか。飢えや貧困にあえぐ子ども達は世界に大勢いるのです。シリアの子どもたち、アフリカの子どもたち……日本の子どもの貧困のことも真剣に考える時期に来ています。私の脳裏に浮かんだのは、昨日届いた国境なき医師団の活動報告の中に入っていたアフリカの子どもの写真でした。そうなのです。一小市民として、大したことはできないけれども、できることはありますよね？

散歩から帰って、夫に話したら、「僕はそんなこと考えて散歩したことないよ。」と言っていました……。本当でしょうか。

いじめの問題について
～ある小学校の話～

いじめの問題がマスコミにも大きく取り上げられている昨今ですが、いっこうにいじめは無くなりません。

今回は、県外の小学校の対応について、感心させられたので書いてみることにしました。

Aちゃんは今、二年生です。難病があり、何度も生死の境をさまよいました。体は細く、足も細く、眼も弱くて三歳前からずっとメガネをかけています。学校に行くには歩道橋を渡らなければならず、重いランドセルを背負っての登下校は、かなり大変です。本人は一生懸命にがんばるのですが、上級生について行くのは辛いこともあります。でも「車で送って」と言わないそうです。

どの学校でも登下校のトラブルは大きな問題ですが、このAちゃんは一年生の時からいじめやからかいを受けていました。わざと靴を踏まれたり、後から引っぱられたり、小突かれたりしていました。子どもたちにしてみれば、押せばヨロヨロとするAちゃんは、格好のお相手だったのでしょうが、Aちゃんはがまんをして両親には余り話したがらなかったようでした。

けれども他の児童がお母さんに「Aちゃんが…」と言ったことがきっかけで、登下校時の様子が発覚しました。たまたまAちゃんのお母さんと相手の子のお母さんは知り合いで、親同士の話し合いでその後はそんなに大きなことにはならずに済みました。でも本当は、他にもいじめをしている子がいたのです。

二年生になったAちゃんは、まだ体力的には弱く、幼い感じがします。視機能も弱いので、板書写しに時間がかかることもあり学習面での困り感もありますが、学校は大好きで、両親はAちゃんの精神面での成長が感じられると嬉しく思っていたそうです。登校班で歩いていく時も決して速くはありませんが、皆と一緒に普通のスピードで歩いています。

ところが、五年生のYさんに、いつも「速く歩けよ！」とランドセルを押されたり、ランドセルの中味を出されてしまったり、絵の具箱を「持ってあげる。」と、わざと取り上げられて道に置かれたり……と、からかいやいじめがどんどんエスカレートしてきたそうです。そこで両親は、やはり学校にも知っておいてもらった方が良いだろうと思い、Aちゃんの担任にお知らせをしたそうです。

学校は、すぐにYさんを注意して下さったそうですが、その日の帰り道で、YさんはAちゃんの黄の帽子のアジャスターを引っぱって伸ばして、あげくに鋏を取り出して「速く歩か

ないと切るよ！」と、おどしてきたそうです。いつも多少のことではお母さんに言わずに我慢するAちゃんが、帰宅するなり泣きそうになってお母さんに怖かったと訴えたそうです。

お母さんは、相手のYさんの家にどなり込もうかとも思いましたが、前日に学校に伝えていたこともあり、やはり学校へ伝えることにしました。でも運悪く下の子が高熱を出したために、些細を手紙にしたためてAちゃんに持たせました。

詳しい内容は分かりませんが、「校長先生や教頭先生もまじえて、Yさん本人と親さんと話したい。」と書いたそうです。するとその日のうちに学校から連絡があって「今夜、話し合いをしましょう」ということになったそうです。学校によっては、保護者と学校側と話し合いをすることになっても本人を同席させないということが多いものです。お母さんはYさんは五年生でもあり、本人の同席を求めたのですが、学校側もそれが良いと判断されたのでしょう。

両親は、どの様に話すべきかと考えた上で、まずお父さんはYさんに向かって話しかけたそうです。「登校班って、どうしてあると思う？」と聞かれたYさんは、「大きい子が小さい子をみてあげるため」と答えたそうです。「うちのAは、Yさんのこと嫌いじゃないよ。よくみてくれることもあると思う。でも刃物を持ち出されて恐かったと思うよ」。と、お父さんはYさんに分かるように話そうとしたと言います。お母さんはAちゃんが小学生になる日が来ることが信じられない日もあったこと、楽しい学校生活を送ってほしいと願っていることを伝えながら、涙があふれてきたそうです。

相手のお父さんは、とても大人しそうな方で、息子の前であやまって下さったそうですが、私はそれはとても大切なことであると思っています。自分がやった行為のために親が真剣にあやまる姿を見て、子どもがどう思うのかが、反省につながります。親の方が、「そんなこと位で何であやまらなくてはいけないのだ」とか「子どもがやったことで大したことではない」と心の中で思っていたり、子どもに対しても「よくあることだし、気にしなくて良い」と言ったりしたのでは、子どもがいじめやからかいをやめることはないでしょう。

この後の校長先生の諭され方を聞いて、私は感動さえおぼえたのでした。（お母さんからのまた聞きです）

「Yさん、あなたはAさんの体は傷つけてはいない。では、どこを傷つけたと思いますか？」「心です。」

「そうですね。でもあなたは、もっと多くの人を傷つけました。分かりますか？」「Aくんのお父さんやお母さん。」

「他には？　それはあなたのお父さんやお母さんです。どんなことがあっても、刃物をもち出すことは決して許さ

れないことです。絶対にやってはいけないことを あなたはやってしまったのです。そのために、あなたのお父さんは、あやまられました。このお父さんの姿を決して忘れてはいけません。」

校長先生にとっては、Aちゃん以上にYさんのことが心配なはずです。教育の場で人を信じることの大切さ 善悪を見極める力などを学んでいってほしいと願っておられるはずです。

「Aちゃんが恐い思いをしたことをご両親は決して忘れることはないでしょう。でも、ご両親は、これからもよろしくと言われました。顔も見たくないとは言われませんでした。ありがたいことですね。

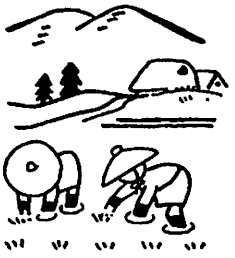
Yさんは、Aさんとは三年ちがいます。勉強と同じように三年ちがうのだから一緒にはできません これからは、ちゃんと見ていってあげられるね？」と諭されたということでした。そして、「刃物は絶対にいけません。いいですね？二度目はありませんよ」と釘をさされたということでした。

子どもを育てるということは、子どもを慈しむ心が根底になければ成り立ちません。子どもに寄り添い、その思いを受け止める、けれども許されないこと、やってはいけないことをした時には毅然とした態度で反省を促す必要があります。

お母さんは、校長先生のことばがYさんの心に届いてほしいと願わずにはいられなかったそうですが、一つだけ気にかかったことがあったそうです。五年生のYさんの担任の先生が、聞きとりをした折に「ちょっと恐い思いをさせてしまって…」という発言をされたというのです。そのことばの中には、Aちゃんの思いに寄り添うことのない姿勢が読み取れ、それ故に、最初のYさんへの諭しが十分に行われず、結局は刃物をもち出すという行為に到ったのだということを、おそらく瞬時に覚ったということでしょう。母親の直観と言えるかもしれません。

ことばは生きものです。何気ない一言がその人の人間観や価値感をあぶり出してしまいます。だからこそ、いじめの問題はいつも不信感をつのらせることに発展していくのではないでしょうか。

いじめの問題は、当事者だけではなく、学校全体の問題として取り組む必要があるでしょうし、いじめをしている側の子どもの内面にひそむ思いにも大人は敏感にならなくてはなりません。「子どもの行動には、何か、必ず意味がある」という視点は、とても大事です。そしてこのケースの様に学校の対応として何より、早く行動をおこすことが信頼につながるのだと思いました。

お知らせ

七月は第一火曜がセンター親の会です。